

研究ノート

J・K・ガルブレイス

『不確実性の時代』考

——主要著作との位置づけをめぐって——

(一)

アメリカのジャーナリストであるL・シルク(Leonard Silk)は、『The Economists』, New York, 1976. (『現代の経済学者——五大エコノミストの栄光と苦悩』稲田猷一・八木甫訳、日本経済新聞社、昭和五十三年四月)においてサミュエルソン、フリードマン、ガルブレイス、レオンチェフ、ポールディングの五人をとりあげ彼らの理論、学説だけでなく、「人と思想」の側面にわたる全体像をきわめて手ぎわよく立体的に描きあげた。まさに彼らが今日「世界的にみても、とくに現代社会に大きな思想のあるいは経済政策的な影響力をもつケインズに続く

浜崎正規

世代の経済学者」(邦訳書、訳者「はしがき」)であることを否定するものはいないであろう。ところで、シルクは五人をつぎのようにそれぞれ興味のある類型化を試みてとらえた。すなわちポール・アンソニー・サミュエルソンを「恐るべき子供たちの名譽退職」者として、「土口き宗教の予言者」これぞミルトン・フリードマン、「計画化の使徒」ワシリー・レオンチェフ、「愛と平和の経済学」建設にたちむかう人ケネス・E・ポールディング、そうしてわれらの時の人ジョン・ケネス・ガルブレイスこそ「涙なしの社会主義」への構図者であると五人に対するシルクのこのような類型的把握がはたして当を得ているかどうかをここで吟味・検討しようとは思わない。

ここでの問題は「涙なしの社会主義」への構図者としてシルクが刻印をおしたガルブレイスが、シルクの著書の刊行の翌年すなわち一九七七年『*The Age of Uncertainty*』, Hong-hon Mifflin Co., Boston (『不確実性の時代』都留重人監訳、TBSブリタニカ、昭和五十三年二月、以後『時代』と略称する)を刊行したことにある。この書物の生誕が、そもそもきわめてジャーナリスティックな経緯をおびたものであったにせよ、その書名はいち早くわが国に滲透し、各界の流行語にまで成長するにおよんで、今日の政治・経済・社会を透視する一つのプリズムとして、あるいは時代思潮を形成してゆく言語力学的作用をもつにいたってさえいるという点である。そこで私はガルブレイスのいままでの主要著作物との連関のもとでこの『時代』を位置づけ、読みこみ、彼自身の思想史および学説史方法論上の問題次元からこれを祖上にのせた場合、どのようなことが考えられるかを検討することにある。

(二)

私が始まるこの『時代』の原書を手にした時、頭を叩かれる思いがしたのはつぎの一文であった。すなわち「ハーヴァード

J・K・ガルブレイス『不確実性の時代』考(浜崎)

の教授たちは、昔の『ビルグリム』の時代にまでさかのぼる慣習なのだろうが、自分が学生を教えることにどれほど深い愛着をもっているかを表明しなければならないことになっている。その講義の退屈さを証明するかのように聴講者の数が減ってしまっている教授連でさえ、この義務に対する己れの献身がいかに大きなものであるかを、教官食堂で感動もあらわに話すのだ。こんなごまかしを続けることに、私は日増しに困難を感じていたのであった。一度ならず私は、むきになって話す若い教師たちの顔を不快な気持ちで見つめている自分に気がついた。許すべからざる発想だったかもしれないが、私は大学をやめようかと考えていたのである。(邦訳書一頁)この箇所がなぜ私の心に訴えたかはほかでもない。私は一九七二年から三年にかけてハーヴァードのリッター・センター(経済学部)で秋学期を過し、S老教授に直接指導をうけながら(教授の大学院講義の学生数は数名であった。教授の聴講生がどのように増減の推移をたどってきているかは知るよしもないことであった)。教官食堂を利用してきたひとりであり、その意味からすれば、きわめて短期間であったにせよここでのガルブレイスのいうハーヴァード教師意識の渦中にまぎこまれていた旅人

であったかもしれないことを主観的には認めざるをえなかったからである。ともあれ、ガルブレイスの強烈な問題意識はたとえBBC放送の注文(「主だった経済思想の発展を広い視野に立って眺づけ、われわれが現に社会生活について抱いている考え方に歴史的意義づけを与えるよう」邦訳書『時代』付録「ガルブレイスと監訳者都留重人氏との対談二頁」)があつたにせよ、「テレビを書物に従属させた」ものとしてこの『時代』を生みおとし、しかも彼の七十年間にわたる生涯の全著作物を串貫する思想の一つの里程碑として、より正確にいうならば彼のいままでの諸々の問題提起(「それらは一つの系統性をもったものと考えられるが、)そして理論化を救済する証明の書を当然のこととして、整序する必要が彼にはあつたと私は考えるのである。後述するところから明らかになるように、私はガルブレイスのこの『時代』をJ・A・シユムペーター(Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950)の遺稿『History of Economic Analysis』, edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, New York, Oxford University Press, 1954, pp. XXV + 1260. (『経済分析の歴史』東畑精一訳(一)巻(七)巻、岩波書店、昭和三十年)と問題意識のスタートにおいて相似したものをもち

つつも彼ら両者がそれぞれ構築してきている「経済学」の学問体系性の相違が結果的にはガルブレイスをして「経済生活を改善するための処方箋を書くよりも、現代の経済学の視点に欠けているものを補うことに重点をおいた」(前掲『時代』付録三頁、傍点は浜崎)ものになり、思想が歴史そのものを形成する過程分析に志向していった。それに対してシユムペーターの場合は、経済現象を理解するために人間が試みてきた知的努力の歴史を意味する経済分析の歴史に帰結してゆく。したがっていわば後者の設問はつねに、「何がいかなる方法で、またいかなる理由で、つづいて生起してくるかを学ぶ」(東畑訳第(一)巻八頁)ことに『経済分析の歴史』の主題はおかれる。それに対して、ガルブレイスの場合は、「思想はそれ自体が重要なだけでなく、社会的行動を説明ないし解釈しうるが故に大きな意味をもつ」(『時代』邦訳書二頁)ことからしていれば具体的な論理、行動における論理、ヴィジョンや目標に植えつけられた論理を開示するためにも思想は大きな意味を担うものと解される。このようにみると、シユムペーターのいう「分析以前の認知活動」すなわちヴィジョン形成の諸過程に焦点をおいたのが、ガルブレイスの『時代』で

あつて、「事實的研究と『論理的』研究とは相互に援助しながら限りなく関連し合い自ら相互に検討を交え相互に新しい課題を投げ合い結局は科学的モデルを作り出す」(シュムペーター、前掲邦訳書第(一)巻、八十二頁)科学的命題史こそが『経済分析の歴史』であつたといふことができる。

ところでさきに私は『時代』と『経済分析の歴史』とは問題意識のスタートにおいて一面相似したものがあつたと述べた。この点については一瞥しておかなければならない。シュムペーターはその晩年の九カ年間にこの『経済分析の歴史』を書くことに傾注したのであるが、遂にその全部を完成するに至らなかつたのである。しかもその書物に対するシュムペーターの問題意識と意欲は、もともとマックス・ウェーバーの編纂した『社会経済学大綱』第一巻(一九二四年出版)のために執筆された『経済学説ならびに方法の諸段階』(Epochen der Dogmen- und Methoden-geschichte, Grundriss der Sozialökonomik, I. Abteilung, Wirtschaft und Wirtschaftswissenschaft, J. C. B. Mohr-Paul Siebeck-Tübingen, 1914; 2ed., 1924)(邦訳書『経済学史』)を最新のものにしようとするころにあつたといわれる。(邦訳書第一巻、編輯者序文、七頁)『経済学の本質と主要

内容』(一九〇八年)及び『経済発展の理論』(一九二一年)によつて三十歳の前半にすでに世界の経済学界に登竜したシュムペーターは、アメリカに安住の地をみいだした。彼は「異常な努力を傾注して巨作『景気変動論』(Business Cycles)を一九三八年に完成し、その後暫らくの気晴しを『資本主義・社会主義・民主主義』(Capitalism, Socialism and Democracy)に求めた。彼がこの書物を単なる通俗的な贈物だという風に看做していたのは明らかであり、その完成には数カ月でもつてこと足りると予定していた。彼はこれを一九四一年中のある時に完了した。その間、彼はハーバード大学で経済思想史(History of Economic Thought)についての半年コースの講義を始めた。これを始めた最初は一九三九年の秋学期であり、その最後は一九四八年の春学期であつた。その間に賜暇をえた一九四〇年以外は、連年これを続けていた。この最後の事情は恐らく決定的な要因であつたと思う。彼は自分がずっと以前から関心をもち続けていた分野において、再度講義をしたのであつた。従つて彼のこの分野について著述をなそうと考へるのは、自然の成行きであつた。彼はまず『経済学史』を英語に翻訳し、改訂を加えたいうでそれを最新のものにし

ようと企てた。最初の程は彼も、その講義において討議し且つ著述の対象とした経済学者たちの著作のなかの純粹分析的要素をそれほどまでには強調していなかった。事実、私も彼が経済思想史を書いているものとばかり思っていた。」(前掲編輯者、序文八一九頁、傍点は浜崎)妻でありそして経済学者でもあった編輯者の述べている傍点部分の箇所注目してみる必要がある。つまりシュムペーターは当初(一九四一年から四三年頃まで)はウィジョン史(彼の場合、すでに定義の上からもほとんどイデオロギー的なのである。△シュムペーター前掲邦訳書第(一)巻八十三頁参照▽)に力点をおいた経済思想史を執筆する意図をもっていたと考えられる。それゆえに「一九四二年から一九四三年に至る二年間に、非常に多くの章や節をタイプにとらせたようであるが、そのほとんど大部分が後になって改訂されている。この『経済分析の歴史』のなかで最初に書かれたままでも後になっても書き改められなかった主要部分は、一九四三年六月にタイプにされた「重商主義」^{メソクワリスト}文獻の章(第二編第七章▽、一部は一九四三年一月、残余は一九四三年十二月にタイプにされた社、会政策と歴史的方法の章(第四編第三章▽、および第三編第六章(一)「一般経済学、純粹理論」)の冒頭

のシ、ニ、ヨ、アの四つの公準の節だけである。しかしこれらも若しもシュムペーターが長命して『経済分析の歴史』を完成していたならば、恐らく改訂されるか、もしくは書き改められたことであろう。」(シュムペーター前掲邦訳書編輯者序文第(一)巻十(十一頁)と夫人は語らざるをえなかったのである。つまり時の経過とともにシュムペーターは経済分析の歴史(経済学の分野における科学的分析の発展と消長)の書を書くことに傾斜してゆき経済思想の歴史書を執筆する当初の意図から推移していったと考えられる。(事実、そのことは、一九四九年イギリスの出版元アレン・アンド・アンウィン社にあてたシュムペーターの手紙において強調されている。「例えば自由主義、連帯主義、その他のものごとく整った体系に具現されていると否とを問わず、普通に経済思想といふ慣わされている経済政策についての色々な考え方(これは元はといえば大衆の心に浮かぶものである)か、それとも立法者や行政官に帰せられるかするものである)は、本書ではただ単に背景の一部分としてのみ現われるにすぎない。本書の主題とするところは、経済的事実を記述し、説明し、そうするための理論的用具を準備せんとする努力の歴史にはかならない」と。△シュムペーター前掲邦訳書第(一)巻十一頁▽)

ともかくシュムペーターが彼自身の手で最終的に結実させ

えなかつたにせよ結果的に意図したものが経済分析史であつたことは明白であるにせよ、当初の構想は、夫人がいみじくも語つてゐるように「History of Economic Thought」のカテゴリイのもとで考えられる一書を上梓することに関心があつたことは否定できないと考えられる。ではなぜ彼は当初の構想を変更せざるをえなかつたのであろうか。本稿ではこの問題について深く論議を展開することをさしひかえなければならぬ。しかし私がさしあつて考へてゐる論点を挙げておくとすれば、シユムペーターをとりまく外的要因と内的要因とを考へなければならぬであらう。しかも前者をめぐつては、一九四〇年代の前半と後半の世界史の動向の屈折——その過程におけるアメリカが代表する資本主義体制、そのものについての彼の認識・理解の推移（彼のいう「崩れ落ちる城壁」観の生成）と、いわゆる「ケインズ台風」の嵐のもとでの現実の資本主義に対する彼の動向認識をみおとしてはならないであらう。後者すなわち内部要因として私はつぎの点をおさえておく必要があると考へる。いわば彼の意図した経済学の体系（一九〇八年の『理論経済学の本質と主要内容』と一九二二年の『経済発展の理論』によつてすでに内実化し、一九三八年の『景気循環論』

によつて自己の理論の検証化作業を行う。）からすれば、すくなくとも自己の理論の全構想を救済する証は、けつして経済思想史のカテゴリイからではなく、自己の立論を足場とする経済分析史が論理の整合性の上からも構築されるべきであつたと私は考へるのである。ともあれ、これらの要因については他日稿を新たにして考察してゆく考へてゐるが、以上のような論証経過から明らかになつたことは、ガルブレイスとシユムペーターの両者は、各々自己の理論の展開過程（ガルブレイスの場合は、問題提起の過程史といつた方が適切かもしれない）を明証し、救済するためにも当然の帰結として、前者は『時代』を後者は『分析』を世に問わなければならなかつたと考へるべきではなからうか。

(三)

さて時の人ガルブレイスは一九〇八年生れであるからいままさに満七十歳の齡である。彼はカナダのオンタリオ州エールジン郡、エリー湖北岸に住みつゝいたスコットランド・カナダ系の移民農家の子供として生誕してゐる。（ガルブレイス自らがまぎれもなくまゆつばものの部類の書物といつてゐる。一九六三

年の『スコッチ氣質』(八土屋哲訳、河出書房新社)は、移民農家の農業経営の様様や彼の生いたった風土を巧妙な筆致で教えてくれる。彼はカナダのゲルフにあるオンタリオ農業大学で農業経済学と畜産を学ぶ学生としてスタートする。一九三一年(二十三歳)カリフォルニア大学バークレーの農業経済学ジアンニ基金の研究助手に採用されて後、蜜蜂とカリフォルニアの農産物市場での価格の下落にかんする処女著作を書いて以後、今日までに二十数冊の著作物を刊行した。

ところで彼の七十年にわたる生涯(一九七五年六月ハーパー・大学教授退任)を、私なりに五つの節目でとらえてみると、つぎのように整理できる。第一の節目は一九三〇年代まで(通過の儀式は苦悩の日々。第二の節目は一九四〇年代(政策立案、官界へ)「計画」経済の模索。第三の節目は一九五〇年代(研究生活復帰)積極的な問題提起と理論構築への道。第四の節目は一九六〇年代前半(インド大使)自己の問題提起の世界史的検証。第五の節目は一九六〇年代後半以後(三度び学究生活へ)彼の理論の確実性の自信とその救済の証明。以上のような仮説を設定してガルブレイスをとらえてみた場合、彼が経済学上の積極的な問題提起を試みたのは、第三の

節目すなわち一九五〇年代、わけてもその間の著作物のうちで『*American Capitalism*』, *The Concept of Countervailing Power*, 1952. (『アメリカ資本主義』藤瀬五郎訳、時事通信社、昭和三十年、以後文献〔I〕と呼ぶ)、『*Great Crash, 1929*』, 1955. (『大恐慌』小原敬士訳、経済往来社、昭和三十三年、以後文献〔II〕とよぶ)および『*The Affluent Society*』, 1958. (『豊かな社会』鈴木哲太郎訳、岩波書店、昭和三十五年、以後文献〔III〕とよぶ)の三つの文献であるということが出来る。そうして、六十年代後半以後、すなわち私の第五の節目に入ったところで『*The New Industrial State*』, 1967. (『新しい産業国家』都留重人監訳、河出書房、昭和四十三年、以後文献〔IV〕とよぶ)と『*Economics and Public Purpose*』, 1973. (『経済学と公共目的』久我豊雄訳、河出書房新社、昭和五十年、以後文献〔V〕とよぶ)とは、第三の節目の前掲三著作の延長線上に論理的には位置するものと考えられる。しかも、第五の節目の文献〔IV〕と〔V〕は、ガルブレイス独特の着想と感興の強さをそれぞれ個有していることを否定しないまでも、両者は彼の経済思想の展開史の頂点ないしは集結点の性格をもった双生関係の労作であると考える。以上のように経済学上注目すべき文献として五つの労作を

とらえ、それらの脈絡をおつてみた時、それらとの関連で『時代』の位置が問われるであろう。私の考えを結論的にいえばこうである。すなわち文献史的関心から読みこめば、それは直線的に文献(V)に連結するものである。しかし前節の(二)のでべてきたように彼の構想全体(彼の生涯における構想の展開過程を考慮した上で)を確かめるに救済の証のために当然のこととしてガルブレイスは著わす必要のあつた(表現様式はともかくとして、そうして成功か失敗かは別として)文献であるといわなければならぬ、というのが私の考えである。その意味からすれば、ガルブレイスにとつて、その書物が狙いとするところは、不確実性であるどころか専ら確実性のあるものでなくてはならないのである。

(四)

「ガルブレイスは本当に経済学者だろうか」というやりとりが一九七二年のアメリカ経済学会の年次総会でも話題になっていた。そのような彼を、「彼は二人とはいえないような経済学者になっている」と経済学者達が評価するために、シルク流にいえば、ガルブレイスは「自分のことを自分で説明

J・K・ガルブレイス『不確実性の時代』考(浜崎)

することからさえも救済される必要があるし、そうさせても与えるはずである」(L・シルク、前掲邦訳書一二三頁)ことを証明する必要がある。いわば自己自身によって説明することさえ必要としないことが客観化されている証を確認する必要がある。その作業は「ガルブレイスは本当に経済学者だろうか」と訝がる純粹競争の概念を砦として立てこもる経済学者達に「彼は何よりもまず経済学者であり、まじめな学者である」(L・シルク、前掲邦訳書一二三頁)ことを自己批判をこめて認知させてゆく手段でもあることを誰よりもガルブレイス自身がよく知っている。いったいこうした葛藤の「ルーツ」はどこにあつたのであろうか。私は直接的に明確な理論的姿勢をとつて顕現するのは彼の生涯の第三の節目に入つて、わけでも文献(一)においてであると考える。もとよりそれに先だつて、すでに一九三〇年代、アドルフ・A・バーリーとガードナー・C・ミーンズの『近代株式会社と私有財産』(一九三二年)の影響のもとで寡占と独占的競争にかんする理論に刺激されてガルブレイス自身も農業部門に対する工業部門の価格・費用の役割を研究した論文を発表している。(Galbraith and John D. Black, "The Quantitative Position of Marketing in the

United States', Quarterly Journal of Economics 49, (May, 1935): 394-413) そうしてまた、「一九三八年(三七年ハーバード大学を離れケンブリッジ大学で社会科学研究員生として一年間を過す。)」には

『近代的競争と企業政策』(Henry S. Dennison and Gahrath,

Modern Competition and Business Policy, New York) を刊行し、

市場の不完全を問題とする。すなわち市場が需要の低下に適切に適応しえないことは、アメリカ経済が自己調整的であることをほとんどやめてしまっていることを意味すると主張さえしているのである。そのように葛藤の「ルーッ」を文献〔一〕に先だって三十年代の後半の文献の中にみいだすことも出来えよう。しかしガルブレイス自身が積極的な武器をかざして「競争モデル学者」と対決するのは文献〔一〕の段階にいたってであるといわなければならない。つまり、ここにおいてガルブレイスの目的意識が鮮明に露出する。その一つは、競争モデルは現実を描写するものでも、実現可能性のある改革の理想でもないことを明示することにあつた。いま一つは、民主主義制度の長所としてのチェック・アンド・バランスシステムを経済問題に適用することによって、競争原理にかわる資本主義の成長と安定の条件を説明しようとしたのであつた。換言

すれば、彼はアメリカの経済体制について、古いものと同じく内部的には首尾一貫しており、かつ現実の世界を適当に反映する新しい理論を築こうとする目的意識を明確にうち出したことにある。こうした二つの狙いを基底にすえた文献〔一〕は、周知の“countervailing power”(平衡力)の概念を提起することによって、純粹競争にかわるより包括的な理論を設定しようとしたのである。かれはつぎのようにいう。「実際には競争に代つて、私的な力にたいする抑制力があらわれた。それは競争を阻害もしくは破壊したその同じ集中過程によつてはぐくまれたものである。しかしそれは市場の同じ側にはなく、反対の側に、つまり、競争相手にたいしてではなく、顧客もしくは売手にたいしてあらわれた。このような競争の対立物は、名前があつた方が便利であらう。だから、わたくしは、それを平衡力とよぼうと思ふ」と。(文献〔一〕邦訳書一四六頁)このようにガルブレイスは平衡力概念を規定することによつて純粹競争モデル学者を縦横に斬ろうとする。「私的な経済力は、それに支配される人々の持つ平衡力によつて抑制されるといえよう。前者は後者を生む。産業が比較的少数の会社的手中に集中する長い傾向の間には、経済学者が考へていた

ように強い売手が生まれてきたが、同時に、強い買手も生まれてきているのである。経済学者はこの点を見落している。この両者は正確に歩調を合わせたものではないが、しかし、お互いに相応するものであることは否定できないふうに発展してきたのである。」(文献「I」邦訳書一四六頁)ところでこのように勢いこんだ平衡力概念の提起は、結果的には巨大企業、巨大労組、巨大な政府すなわち「アメリカの経済生活における大規模で攪乱的なマンモスたち」(L・シルク、前掲邦訳書一五二頁)の活動を正当化することになり、そうして「平衡力は、アメリカ的信条の中で最も気持のよいもの、連邦政府の抑制と均衡という制度、と容易に調和するものであること」(L・シルク、前掲邦訳書一五三頁)を暗に示したことになったのである。それにしても文献「I」の中で展開したガルブレイスの考え方の中には、自己矛盾とも思えるものがひそんでいた。すなわち大企業は規模の経済を可能にし、生産物と生産技術の革新を行ないやすくなって以後、もの不足に煩わされなくなった社会は、管理価格、大がかりな広告、販売費に帰すべき非効率を楽に維持していけるようになったと彼は主張する。(つまり、このような考え方の背景に、はつきりとJ・A・シュムペーター

の仮説を借用しており、研究・開発に利用しうる資金をもつ独占企業は、資本主義の活力である革新にはとくに適しておると考えている。)しかしながら、平衡力の理論は、経済権力の大幅な増大が本質的には悪いことではないとしながらも、体制の安定性や存続性にとつてさえ脅威となつているインフレーション問題に対する解決策をなら提起していないという点である。このことは誰人よりもガルブレイス自身が自覚的に意識していたところではなからうかと考えるし、それゆえにこそ彼の苦悩はより一層深化していったというべきであろう。

ところでその苦悩の深化は、ガルブレイス自身が自己体験した資本主義の危機の歴史に回帰させてゆく。それが文献「II」である。つまり一九二九年の株式市場崩壊についての年代研究を行うことによつて、そこでの教訓をふまえて現実のアメリカ資本主義が真に「depression-proof」(恐慌免疫的)となつたかどうかを明らかにしながら展望を与えることにある。その帰結はこうであつた。(一)一九二九年のような大恐慌は今後おそらく起ることはないであろう。だがしかし、(二)ひとつの憂慮がある。それは合理的な経済的考慮が、その場かぎりの無責任な政治的判断によつて攪乱され、ゆがめられ

るということであつた。こうした憂慮事項がたえず前途には考えられるにしても、一応樂觀的展望をアメリカの豊かな社会に与えることができたものの、その豊かな社会のもとなぜ人々は貧しいのか、両者の同様の論理を明示してゆかなければならなかつたのである。その作業が一九五八年の文獻〔Ⅲ〕であつた。つまりここにおいて現実の豊かなアメリカ社会に巢をつくっている「伝統的な觀念」Ⅱ生産の優位性、思想に対する攻撃が展開されてゆくのである。すなわちA・スミスからA・マージナルにいたるまでの経済思想については展望し、そこで三つの重要な問題(生産、不平等、不安定)を区別する。そうしてこの三つの問題についての評価が、経済学が通念に残してきた遺産であり、陳腐化した信念の中心ななすものであることを指摘する。かくして、現実の繁栄の性質を分析するツールとして“dependent effect”(依存効果)の概念が提起される。すなわちガルブレイスはそれをつぎのように説明する。「社会がしだいに豊かになるにつれて、欲望が充足される過程がますます多くの欲望をつくり出す。これは受動的に作用するかもしれない。生産の増加に対応する需要の増加が暗示や見栄を通じて欲望をつくり出す作用をい

となむ。あるいはまた、生産者が、広告や販売術を通じて積極的に欲望をつくり出すかもしれない。欲望はかくして生産に依存するようになる。……欲望は、欲望が充足される過程に依存するというばあいは、それを依存効果とよぶのが便利である」と。(文獻〔Ⅲ〕邦訳書一四四—一四五頁)この「依存効果」概念を下敷きにすえてみた時、ガルブレイスには、経済のかりの多くの部門について、生産の増加はより大きな福祉ではなく、より程度の高い欲望造出を意味するにすぎないものとして扱えられるのである。したがってそのような社会においてとはとりもおさず、生産の増加が社会の強制的な経済目標であるという觀念を依然として残しておくことになる。それには二つの理由があるというのがガルブレイスの主張である。その第一は、希少という神話が依然として人々をとりこにしたことである。第二には、生産は安全を高め、社会的紛争を最小化するための手段として登場したことである。いわば不況のない、絶えず拡大してゆく経済は、社会を落着きのあるものとする最も確実な方途であるという考えがそこに随伴するのである。そうしてまた、社会の進歩を判定する客観的な方途としては、国民総生産の増加を示すデーター以上の

ものはない。それゆえにこれが経済分析と計画化のよりどころとなつてゆく、という論理関係からしても生産の重要性が強調されることになる。このような二つの理由があるにせよ「個人の欲望が重要であるというのなら、その欲望はその個人自体から生まれるものでなければならぬ。個人のためにわざわざ作り上げられたような欲望は重要であるとはいえない。欲望を満足させるところの生産過程によって作りあげられるような欲望はもつてのほかである。なぜならば、もしそうとすれば、欲望が重要であるから生産も重要なのだという主張は崩壊するからである。もし生産が欲望を作り出すとしたら、欲望を満足させるものとして、生産を弁護することはできない」(文献〔Ⅲ〕邦訳書 一三九—一四〇頁)として、生産第一主義の「経済学の全体系に疑問をなげかける」(文献〔Ⅲ〕邦訳書 一二九頁)とともにときにはそれを危険でさえあることを指摘する。このような「生産の神話」に対して痛烈な批判を展開してゆくガルブレイスは現実のアメリカ経済の拡大のなかに深刻な問題が現実化している点をおとさなかつた。その第一点がインフレーションであり第二点は、彼が「社会的バランス」とよぶものの破壊の進歩であつた。しかも私的財

J・K・ガルブレイス『不確実性の時代』考(浜崎)

と公共財を差別する生産の側の価値体系が、この社会的バランスをよりいっそう損つてきているという点である。このような現実を前にして、ガルブレイスの政策的提言はなされてゆく。すなわち、社会全体について財はもはや幸福と同一視されなくなつた今日、生活の質全般にわたつた留意が必要となる。そうした状況下においてはまず第一に「生産の神話」にとつて代わる新しい社会的指導原理をうちたてることが必要である。第二には教育を計画の中心にすえることによつて、「新しい階級」をつくりだしてゆくことである。なぜならば、教育は第一の提言にかかわつては、まさに有害かつ不必要な生産への依存を打破する道を用意してくれるものであり、第二の提言との関連においては、現実を増大しつつあるハワイ・カラーの労働者集団すなわち「新しい階級」(この特徴についてガルブレイスはつぎのようにのべる。「肉體労働を免かれること、退屈さと制約とをきびしいきまりきつた仕事とから逃れられること、肉體的に気持ちのよいきれいな環境で生活できること、ある程度は自分の考えを毎日の仕事に適用する機会があること」(文献〔Ⅲ〕邦訳書 三二六頁)へ)の前提条件であるからである。

さて、私はガルブレイスにとつては「貧困の経済学」の止

揚の書とでもいうべきであろう文献〔Ⅲ〕の内容上の筋を追ってみた。たしかにそこにおいて、アメリカの経済そして社会の悪の華を摘出し、それが開花する起因を「伝統的な観念」
 Ⅱ「生産の神話」の性格の中にみいだした。しかし彼はけっしてその起因を経済の「体制」や社会の「体制」の性格にみいだしてはいないのである。換言すれば、彼の関心事は、大企業が人々の心を支配すること自体におかれていたのである。つまり、生産の拡大への入れ込みと、それに付随する欲望造出現象は、社会のビジョンを曇らせるという認識である。そうしてその認識視角からのアメリカ社会ひいては国家への覚醒をうながす警鐘の書それが文献〔Ⅲ〕でもあったということができよう。たしかにこの文献〔Ⅲ〕は、〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕とは質を異にしたしかも高い評価をうけた。そうして彼ガルブレイスの知名度を高める役割をはたしました。しかしながら、私はそこには根本的な問題を残していたことを指摘しなければならないのである。すなわち第一に彼の主張する新しい社会的指導原理とはいったい内容上どのようなものを用いるのか。それは「体制」問題とはどのような関連にあるのか（あるいはないのか）。第二に「貧困への戦い」は、無制限な産業の拡大の破壊的効

果（大企業の威圧的支配力）を阻止するといった大企業の生産の次元問題としてのみとらえることの可否の問題、第三には、貧困を除去し、私的財と公共財との社会的バランスをとりもどしてゆく中核に教育を設定するが（教育は）有害かつ不必要な生産への依存を打破する道を用意する。（ロ）教育をうけた個人は、より高い教養をもち、非物質的な目標に導かれて、広告キャンペーンによって作り出された欲望を受入れにくくなる。（イ）教育水準の高い社会は、社会の福祉がどこにあるかをいっそう決定しうるようになり、所望の方向へ向かうためのよりすぐれた条件を備えることになる）彼の「体制」内的発想のもとでの教育に彼自身魔法の杖をみいだしているといわなければならない。このようにおおよそ三点の問題点を指摘しなければならないのである。

さて、以上考察してきたガルブレイスの生涯の第三の節目の主要な文献と考えられる文献〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕は、一連の問題提起の書（正統派の経済学者Ⅱ新古典派経済学者達に対する痛烈な批判をこめた）であったということができよう。しかもそれらはガルブレイス独特の皮肉な謙虚さと上品な傲慢さが交錯したものであったことを付記しなければならない。にもかかわらず、文献〔Ⅲ〕にいたって彼の知名度は、やがて彼がイン

下大使（一九六一〜六三年）に就任することに大きな抵抗を生じさせなかった。私はこの六十年代前半を、彼にとって自己の理論的世界史的検証期として性格づけするのである。

(五)

この「検証期」をガルブレイスの全体的な思想体系にかかわらせてとらえようとする場合、彼が一九六九年に公にした『Ambassador's Journal'-A Personal Account of the Kennedy Years』（大使の日記）西野照太郎訳、河出書房新社、昭和四十八年）を看過することはできないであろう。しかし本稿における課題からすればそれに関連する必要はなからう。けれども彼が「わが国の歴史のなかで、華やかで実りの多い幕あい」（西野訳書七頁）とよんだケネディ時代から「偉大な社会」のジョンソン政府時代にかけて、ガルブレイスにとっては自己の理論の検証期であり、また野心多き期間であったということができるのである。野心の一つは政界への道であり、いま一つは前節(四)で私が指摘してきた文献(Ⅲ)が内含しているいくつかの問題点の解明の道ではなかったかと考える。前者の道はともかくとして後者の道は一九六七年の文献(Ⅳ)と文献(Ⅴ)

J・K・ガルブレイス『不確実性の時代』考（浜崎）

に結実するものであった。（ガルブレイス自身文献(Ⅳ)においてこのべている。「本書の発端となった想念は、『ゆたかな社会』のそれと同じである。両者は、家と窓の関係にある。本書が建物であった、さきの書物がその建物への第一瞥を与えたものにはかならない」と。邦訳書六頁(Ⅳ)と(Ⅴ)との間には五年の歳月があったにせよ、私はこの両文献は双生関係にあるものであって統一的理解のもとにとらえなければならぬと考えている。（ガルブレイス自身は文献(Ⅴ)において、「Ⅲ」と「Ⅳ」と「Ⅴ」を彼の三部作としてとらえており、そうして「もう一つの本『アメリカ資本主義』一から尾を引いているところも、それほど多くはないが、いくらもある」とのべている。△邦訳書四四一〜四四二頁(Ⅴ)）つまり彼の生涯の第三の節目の三つの著作物(文献(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ))の段階では、いまだ現実の資本主義社会(アメリカのそれが巨大な国家と緊密な相互関係をとり結ぶのに大株式会社を環としていることを主観的にはともあれ、客観化して認識するところまで十分にいたっていないかった。しかしながら第四の節目すなわち政治生活を契機として第五の節目にいたってその問題が理論の場面に体系的にしかも掘り下げられて登場してくる。すなわち文献(Ⅳ)と(Ⅴ)がその役割を担っているのである。そのよ

うな経緯からも、私は第四の節目を文献史的にみてエポック・メイキングな段階としてとらえることができると考え、彼の理論の世界史的検証期として画するのである。すなわちアメリカ大使としてインド、ニューデリーに生活するガルブレイスにとって、現実のインドの貧しき人々を目前にして「国家とは何か」をあらためて問ひなおさなければならなかったのではないか。しかもその現実を、一九五八年の文献〔Ⅲ〕すなわち「The Affluent Society」の論理に重ね合わせてみた場合、「国家とは何か」その現実の姿態はどうか。文献〔Ⅲ〕の問題意識の盤面において整序を試みてみれば「生産の神話」にいまなお生き生きと脈搏をたぎらせている現実のしくみは何か。(問題〔A〕と呼ぼう)そうしてその神話をたえずリフレクションさせようとするものは何か。(問題〔B〕と呼ぼう)という事実上二問の問いであっても一問に帰着するそれであった。まさに問題〔A〕への解答、これこそ文献〔Ⅳ〕であり、問題〔B〕に対応するもの、それが〔Ⅴ〕であったと私は考えるのである。

さて、ガルブレイスは問題〔A〕を「新しい産業国家」のしくみとしてとらえた。つまりいままでは、社会は、市場原理によって動かされていたのに反して、いまや市場を意のまま

に動かすような大株式会社が成立し、そしてそれが同じように巨大化した国家との間に緊密な相互関係をとり結び大きな管理社会を形成している世界と規定する。いわば、巨大企業は進歩した近代的生産技術大資本との結合にとどまらず、従来の企業のように市場原理に支配されることなく、自ら計画の主体となって自主的な企業活動を営んでいるのである。それゆえに「われわれは、過去の経験から産業的企業の中の新しい権力の移動がおこることを期待すべきであるが、そのような移動は、こんどは資本から組織された知能への移動である」(文献〔Ⅳ〕邦訳書七十四頁)と考えなければならぬ。そうして「企業者——すなわち個人主義的で、一刻も休むことがなく、ヴィジョンと知恵と勇氣をもった企業者——は経済学者の唯一の英雄であった。大きな企業組織は、けっしてそれと同じような崇拜をひきおこすことはない。……営利企業における権力や社会の権力は、個人にはなく、まさに組織に移った。だから現代の経済社会は、その目的からみて、自然人よりずっとすぐれており、その上、不死身という利点をもつ集団的人格を、組織の力によって合成しようとする」。(文献〔Ⅳ〕邦訳書七十九—八十頁)ここにおいては、J・A・シ

ユムベーター流の経済発展の理論的主体は死滅し、組織としての技術者、すなわち“technostructure”が登場してくるようになるのである。すなわち「情報を提供する役割を果たすひとは、ひじょうに多数であつて、その範囲は法人企業の大長老の役員から、それが外側の周辺で指令や日常業務に、多かれ少なかれ機械的に従事する職能をもつ事務労働者や筋肉労働者に接するところまでおよんでいる。それは、専門知識技能もしくは経験をもつ、集団的デザイン・マーケティングのために貢献するすべての人間をふくんでいる。経営者ではなくて、これらのものこそが企業の指導的な知性であり、頭脳である。集団的デザイン・マーケティングに参加するすべてのもの、もしくはかれらが形づくる組織には名称がない。わたくしはそれをテクノストラクチャとよぶことを提案する」と。(文献〔Ⅳ〕邦訳書、九十一―九十二頁) このように産業国家のもとの企業の態様を“technostructure”概念を提起することによって把えてくる。

つまり、産業国家は特定の制度的、心理的輪郭をもった統一的、連鎖的な全体なのである。ところで、ガルブレイスは資本主義であれ社会主義であれ、「技術や組織」は産業制度

J・K・ガルブレイス『不確実性の時代』考(浜崎)

の大まかな意味での収斂に役立つと主張する。(文献〔Ⅳ〕邦訳書二十一頁)したがってイデオロギー的なイメージはそうした制度を記述するにはもはや陳腐化してしまつたと考えるのである。『不確実性の時代』をめぐる付録八都留重人氏との対談のなかで資本主義と共産主義の収斂傾向をめぐる、ガルブレイスが「現代の法人企業のもっとも根深い趨勢は、それを社会主義化するという点にある」と書いている点について都留氏が問いただしている。すなわち、現代の法人企業が計画化の原理を企業内で全面的に適用しているということはよくわかるのだが、「自らを社会主義化している」という言い方は、はたしてどうだろう。なぜそんな言い方をしたのか、と。(付録四―五頁)これに対して、ガルブレイスが「君の説得力をもつても、この点についてだけは、ぼくは引き退がるわけにはいかない」と自信のほどをしめしている点は、文献〔Ⅳ〕とかわらぬように注目すべき発言と思える。その視角からすれば、産業国家は、自ら深刻な問題を作り出しておるといわなければならぬが、しかし同時に、自らを救済する萌芽を含んでいるということもできる。

ともかく、文献〔Ⅳ〕は文献〔Ⅲ〕が提起した二つの局面(一)「新しい階級」の問題と、(二)経済的安全の要求の問題を切り開くことに彼なりに成功した。その場合、論理構築の中核に技術

が位置づけられる。彼によれば技術とは、「科学的ないしその他の組織された知識を実際の仕事に系統立てて適用するもの」と定義される。(『文獻』Ⅳ)邦訳書 二十六頁)そもそもここでいうところの科学的知識、ないしその他の組織された知識とは何かが問題であろう。私はそれらのことを拙著『現代と社会思想—修羅の妄執—』昭和五十二年(玄文社刊)の中で明らかにする努力を行ってきた。そもそも科学というものは、自然の生成変化の作用因を認識するものなのである。いわば物質的客体の世界にかかわるものである。したがってその認識の働きは純粹な知性に根づいているものなのである。それに対して技術は科学認識の自己拡散性に対して、自己を目的論的に凝縮させる方向性いいかえれば自己統一体を完成させるため自然や世界に向けて人間の物質的な力を拡大せんとするものなのである。そのように科学と技術はきわめて対照的な表裏の性格にあるものと私は考えるのであるが、ガルブレイスは、その点についてはなんら自覚するところもなく、上記のような定義づけを行うのである。つまりそこには両者を結合させる原理がなんであるかが問われていないのである。このことが彼の理論なり、全体的な問題提起の基本的しかも大きな弱

点となっていると私は考える。そういった点については別の機会に稿を新たに論をすすめることにする。

ともあれガルブレイスの主張する技術は、近代的な工業生産の品質証明の主役の座についた。そうしてまた、その主役が社会に対して最も強く要求するものは、熟練労働力と事前的な計画の確実性であった。かくして前者は企業家の優越性を、後者は市場の優越性を取去ってゆくと考えるのである。

もはや市場の敵はイデオロギーではなくなった。それは技術であり、より正確にいうならば「技術を統御する人々」なのである。まさに新しい産業国家の目標こそ経済的確実性であり、それは生産の絶えざる拡大(企業の成長率の極大化)を意味する以外の何ものでもなかったのである。

ところがそのような「新しい産業国家」の内部には、避けることのできない副次的効果が生じているのである。すなわち(一)人間生活の環境基準の崩壊であり、(二)インフレーションと賃金・物価のスパイラルであり、(三)私的財と公共財との不均衡である。このような不可避な諸々の現実を前にしてもガルブレイスは救いの手がかりを教育にもとめてゆき、「新しい階級」としての“educational and scientific estate”(教

育者・科学者階級)の大きな影響力に期待したのである。しかしながらこのような不可避免的副次的効果をはらむ産業国家をめぐっては当然のこととして彼は、私が前に掲げた設問〔B〕にせまらなければならないのである。(たとえ五年間のうちにアメリカ自体の世界史上の地位にどのような移動が生じようとも、また正統的経済学者からのガルブレイスに対する評価に変化があろうとも)その帰結が文献〔V〕であったことはすでに指摘したところである。

さていま一度設問〔B〕を再確認してみよう。それはつまり「生産の神話」をたえずリフレッシュさせてきているものなのかということにかかわる。文献〔V〕のまず第一の題材はこの問題に対応する。ここで彼の結論を紹介するならばJ・M・ケインズ↓サミュエルソンの主流経済学こそがその神話をリフレッシュさせる主役を演じてきていると指摘するのである。いわば彼らの経済学は現代社会を悩ましている最も重要な問題(①資源利用を戦争のために準備する、②社会的緊張をもたらす極端な経済的不平等、③都市と自然の環境の醜悪化)に対してなんら有効な手段をもたないのみでなく、経済における権力の役割を軽視したことによって、自己調整的な価格機構をもつモデ

J・K・ガルブレイス『不確実性の時代』考(浜崎)

ルとともに、理論を現実世界から断絶してしまった。そうすることによって主流経済学者は大企業に対しては都合のよい空想にもとづく弁解なり晦渋な議論を提供してきたと論難するのである。ガルブレイスはただ単に論難することにとどまっ
てはいない。彼ら主流派の経済学者たちによってつくりあげられてきている経済的信条の愚かさから自ら解放しようと努力する人々(同僚の経済学者を含めて)の手助けをしなければならぬことを自負するのである。その自負のためには一度現代の資本主義の全体像をデッサンしなければならぬことは勿論、手助けする自己がその信条からどのように超えるかを提示しなければならぬ。いわば文献〔I〕によるアメリカ経済をめぐる問題提起からはじまって文献〔IV〕にいたるまでの論理の全構造を統一化するとともに、文献〔V〕で明らかにしえた新しい産業国家をいかに超えるかという自らの姿勢をしめさなければならぬのである。かくして文献〔V〕における彼の「新しい社会主義」を強調する、社会主義者ガルブレイスが登場するのである。彼の主張する「新しい社会主義」は計画体制の機構、保護政策、支配力を市場体制にまで拡大しようというものである。ガルブレイスによれば事実

そのような体制はすでに農業・保健サービス、住宅、交通などの準市場分野ですでに進行していると信じているのである。このようにして文献〔V〕においてL・シルク流にいうならば「涙なしの社会主義」の道を歩む社会主義者ガルブレイスが登場するのである。

(4)

アメリカの現代社会における最も深刻な問題——生産者による社会支配、不平等な社会発展と所得分配、環境の荒廃やその犠牲となっている消費者、インフレーション、国内的、国際的な両面での計画の必要性——を公衆が理解し、それらに対処していくのを手助けするガルブレイスは「新しい社会主義」建設の水先案内人の使命を担った社会主義者として登場したのである。すなわちわれらがガルブレイスは文献〔V〕において最終的には社会主義者としての姿勢を顕示してきたのであった。その彼が三年後にいま話題の書『時代』を刊行したのである。すでに(一)のところでは私がのべたように、ここではこの『時代』の内容を目次にそって、あるいは関心の所在にしたがって紹介するところに目的があるのである。

すでに考察してきたように彼の一連の主要著作物との脈絡のもとでこの『時代』を位置づけ、彼自身のそこでの立場を彼の学説史の問題側面からアプローチしてみることにあった。ところで、いみじくもガルブレイスは都留氏との対談で「ほくが一番関心を寄せたことといえば、君も同意見だと思いが、経済生活のすべては歴史過程の一部だとみたマルクスのみのもり多い思想の流れを重視することだった。近代経済学というのは、その大部分が、このきわめて大事な歴史的過程というものを見失ってしまっている。そうは思わないかね、シゲト。」と語り、都留氏は、「君の言うとおりだと、ほくも思うよ、ケン。」と同意する。(付録三)ガルブレイスがはたしてマルクスを適確にとらえているかどうかはこの『時代』でいえば第三章「カール・マルクスの異議」にかかわって論議すべきところであろう。しかしそのことを本稿で特にとりたてて論議しようとは思わないし、その能力も私にはない。問題は「経済生活のすべては歴史過程の一部」だとする思想にかかわってである。つまり、ガルブレイスの「思想」観と思想のとらえ方の問題に焦点がある。なぜ私がそこに関心をおき、彼の『時代』の今日的、通俗的関心事である「不確実

性」問題に関心をしめさないかといえば、すでにのべたところであるが、私はそれを彼自身の過去の一連の問題提起の救済のための証明の書として理解するからである。逆説的表現をすれば、ガルブレイスにとつては、彼の問題提起のすべてのことは極めて確実性の高いものであったことを証する必要がある。しかしその証のためには、証の思想が明らかにされなければならぬのである。それが『時代』なのである、と私は考えるからである。まさにその書は、一九三〇年代ガルブレイスがカリフォルニア大学で学んだ教師の中で、彼自身が「教師のなかのヒーロー」(『時代』邦訳書 六十三頁)とよんだ T・ヴェブレン (Thorstein Bunde Veblen, 1857-1929) の『*instinct of workmanship*」(製作本能)の学者的噴出物なのである。

まずわれわれは、ガルブレイスのいう「思想」観ならびに「思想」のとらえ方についての見解に耳をかたむけてみよう。彼はつぎのようにいう。「思想はそれ自体が重要なだけでなく、社会的行動を説明ないし解釈しうるがゆえに大きな意味をもつ」。「それぞれの時期の支配的思想とは、人びとや政府がそこに指針を見出すような思想である。だから思想が歴史そのものを形成するのに一役を買う。市場の力や国家権力

J・K・ガルブレイス『不確実性の時代』考(浜崎)

の危険性について人びとがどう考えるかということが、どんな法律をつくるか、またはつくらないかということに関係してくるし、また、人びとが政府に何を期待し、市場の力にどこまでを任せるかという問題と深くかかわってくる。したがって、きわめて大ざっぱにはなるがわれわれの思想のところえ方は次の二つに分けられると思う。つまり最初に人と思想が存在し、次に思想の帰結が到来することになる。まずアダム・スミス、リカード・マルサスが登場し、次いで彼らの体系が、イギリス、アイルランド、新世界にどのような影響を与えたかという問題である。先に経済思想史(the history of economic ideas)が論ぜられ、続いて実体経済の歴史(the economic history)がとりあげられることになる。」「(『The Age of Uncertainty』, p.7. 邦訳書二二三頁) いささか長文にわたって引用したきらいはあるが、ガルブレイスの主張のこの箇所は、きわめて重要であると私には考えられるからである。というのは、かつて伊東光晴氏はこの『時代』を「経済史を背後に背負った学説史である」という点では、非常に面白い」(『不確実性の時代』考、伊東光晴・西村周三対談『経済評論』昭和五十三年六月号、傍点は浜崎)と評価しているが、私にはそのような「経済史を背後

に背負った学、説史」というようにただちに読みとることにば一定の距離をおかざるをえないのである。というのは、理論以前の経済に関する諸思潮と、ひとりひとりの思想家との関係が浮きぼりにされるところに主題がある。つまりひとりの人間に諸思潮はどのように整序され整合化されて思想化されてゆくか(すくなくとも系統性と体系性をもったものとして)。そしてその思想の作動はやがて帰結を時空間の実体経済の歴史にどのように具現化するか(あるいはしないか)の局面が問題視されていると思えるからである。『時代』をそのように読みとることがガルブレイスに最も忠実な理解の仕方と私は考えるためにあえて右の引用を紹介したのである。しかもその『時代』は、アダム・スミスからサミュエルソンにいたる確実性思想家の主役たちを、ガルブレイス自身の現実的視点から投影しなおしてとらえていった時、実体経済史の起伏にそれらの思想はどのようにかわったかを明らかにしようとしたものということができるのではなからうか。だからといって、私は経済に関する思想の一方的規定性のみをガルブレイスが強調しているとは考えない。それどころか、彼はケインズが呼んだ “Vested economic interest”(経済的既得権益)によって、

さらには環境の横暴な支配 (the tyranny of circumstance) によって影響されることを指摘している点を読みとるし「思想は既得権益にまざる場合ももちろんであるが、その逆に思想が既得権益の申し子である場合もきわめて多いのだ」(『時代』邦訳書 十四頁) といっている箇所にも注意を怠るわけではない。つまり学的認識の体系にまで形成された既得権益の思想をも看過してはならないであろう。その意味からもガルブレイスのこの『時代』が、経済学における歴史の視点の重要性を強調する経済学史構築のきわめて野心的な問題の書として理解し論議を展開することを否定するものではないであろう。しかしそれにもましてガルブレイスは、彼自身をひとりの思想家として戦後史のアメリカ経済の中に位置づけ、自己の思想が実体経済の動向(不確実性の時代と彼自身が確信する)にどのように帰結しているかを自らが明らかにしようとするところに主眼点がおかれていることをみおとしてはならないと考える。その視角からこの『時代』を読みこんでいった時、ガルブレイス自身の思想史をそこに発見することができるのである。しかもその思想史が彼独特の視点史によって多彩にえがきだされていることを何人も否定しえないのではなからうか。

(七)

私はガルブレイスの話題の書『不確実性の時代』をとりあげてゆくのに、彼の一連の主要著作物とかかわらしめて考察してきた。そこでは一般的世評と通念上異なつて、ある意味では私は積極的評価をそれ自体に与えてはいないかもしれない。ましてや不確実性概念をめぐつてはすでにJ・Mケインズが「体制」認識のもとでの理論的整理を行ったところであつて、なんらガルブレイスによつて経済学上の概念に新鮮さを加味したものでもない。すなわちそもそも資本主義的企業の窮極の目的はいうまでもなく利潤の獲得にあるが、このための企業による財の生産と最終消費者へのそのの販売との間には、通常、長短さまざまな生産期間および流通期間が介在するのである。そこで企業者は、財の生産に先立つてあらかじめその売上金額についての最善の期待を構成し、その期待を手掛りとして産出量および雇用量を決定しなければならぬのである。

この場合、古典派経済学は周知のようにいわゆる完全予想の想定をおいて、企業者の期待が常に完全に実現されると見

J・K・ガルブレイス『不確実性の時代』考（浜崎）

たため、期待が経済分析において固有の役割を演ずるということは全く考えられなかつたのである。これに対してケインズの場合は、現実の経済が不確実性の支配する世界であり、しかも頼みがたい不確実な将来についての期待が現在の雇用量および産出量の決定に重大な影響をもたらすことを重視して理論を構成しようとするのである。このことから、ケインズ理論は、定常状態をとり扱う古典派経済学と異なり異時点間の問題をとり扱いうる動学的性質をもちえたのである。それにしても、ケインズ理論は、現在時点から将来時点への経済体系の運動をとり扱うという意味においては、あくまでも短期分析の観点から、将来時点の諸条件についての期待が現在時点の行動に及ぼす影響をとり扱うという意味においてであつたことを看過してはならない。

このようなケインズ流の不確実性概念を慣用してきている経済学の領域からすれば、ガルブレイスのそれは、「前世紀の経済思想の中にあつた確固たる確実性を、現代のもろもろの問題が直面している抜きがたい不確実と対比させたのである。前世紀では、資本家は資本主義の繁栄に、社会主義者や帝国主義者は、それぞれ社会主義、帝国主義の成功に確信をもち、支配階級は、自らが支配者た

るべく運命づけられていると認識していた。こうした確実性は、今やほとんど残っていない。人類が現に直面している諸問題の驚くべき複雑さを考えながら、前世紀の確実性が残っていると考えるほうが、かえっておかしいくらいである。△『時代』邦訳書二頁▽経済学上のカテゴリーというよりも、哲学上の世界観の範疇とでも考えなくてはならない内容（実は内容という用語を使用するのにはあまりにも不鮮明であるが）と考えられる。

およそ私はガルブレイスの七十年にわたる人生を通過の儀式に始まって、彼の理論の確実性の自信とその救済の証明にいたる間を五つの節目でとらえ彼のきわめて灰汁あじの強い個性的なものの考え方に立脚した経済観・社会観そして国家観を一連の主要著作の中にみいだしてきた。ところでそのような彼の思想形成の背後にはなんとといっても一九三〇年代の大恐慌とそれに続くニューディールの時代が社会経済的背景として大きく彼に作用したであろうことは否定しえない。そうして思想的環境としてはJ・A・シュムペーターの経済発展の理論の影響やJ・M・ケインズの理論、政策へ新重商主義思想▽が大きくかかわっていることも首肯しなければならない。しかしながら一九三〇年代の若きガルブレイスにとって決定

的な思想の泉となったのはT・B・ヴェブレンであったのである。そのことはいまや社会主義者になったガルブレイスをどのように評価してゆくにせよ、看過しえない分析因子であることには間違いないであろう。